

幽霊と妖怪の世界 ~福岡市博物館所蔵旧吉川観方コレクション~

会期/2004年7月23日(金)~8月29日(日)

吉川観方の幽霊画

吉川観方(1894~1979)は、7歳で書を、8歳で絵画を習得した早熟の人。大正3年に京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)に入学、在学中に文展に入選、映画会社松竹に入社して舞台意匠の顧問となる。30歳で故実研究会を創立、風俗史研究に本格的に取り組む、その頃から風俗資料も積極的に収集した。幽霊・妖怪の絵画も若い頃からの収集品で、大正14・15年には幽霊画集を出版している。観方の幽霊画コレクションは、江戸時代から明治時代までの作品が中心で、京都ゆかりの作家の作品が多いのが特徴。観方は著書『日本の女装』の中で、次のように述べている。

「幽霊は真実にある。幽霊には幾種類もある。死人の魂・ひとたま・なきたま、それが神経の作用につれて見える。」

吉川観方 略年表

明治 27 年(1894)	京都市に生れる
明治 33 年(1900)	岡阪鉄山に書を学ぶ
明治 34 年(1901)	西堀刀水に日本画を学ぶ
明治 38 年(1905)	京都市立一ツ橋小学校卒業
明治 40 年(1907)	藤原重浪に和歌の添削を受ける
明治 42 年(1909)	浮世絵の研究をはじめ
大正 2 年(1913)	京都府立第一中学校を卒業
大正 3 年(1914)	京都市立絵画専門学校 予科に入学
大正 6 年(1917)	第 11 回文展に「舞台のかけ」入選
大正 7 年(1918)	京都市立絵画専門学校本科を卒業
	松竹合名会社 に入社、舞台意匠顧問となる
大正 9 年(1920)	京都市立絵画専門学校研究科を終了
大正 12 年(1923)	故実研究会 を創立
大正 14 年(1925)	『観方創作版画 第一集』を刊行
	三木翠山と創作版画展を開催
	以降、展覧会等に作品を発表せず、故実研究会の活動が中心となり、 風俗研究 や 資料収集 が盛んになる
大正 15 年(1926)	映画「 大坂夏の陣 」(監督:衣笠貞之助)の衣装をてがける
昭和 6 年(1931)	京都市長公舎で風俗参考資料特別展観を開催
昭和 8 年(1933)	染色祭に参画する
昭和 9 年(1934)	東山区の自宅に観方写生場を設け、故実研究会の写会を開催(上村松園など日本画家も参加)
昭和 11 年(1936)	故実研究会のため 風俗博物館仮陳列場 を東山区に設置
昭和 29 年(1954)	時代祭に婦人列装束調査委員として参画する このころ全国各地で風俗資料展を開催
昭和 32 年(1957)	映画「 源氏物語 浮舟 」(監督衣笠貞之助)の時代考証を手がける
昭和 40 年(1965)	京都市から第1回観光事業功労賞を授与される
昭和 41 年(1966)	京都新聞社から文化賞を授与される
昭和 42 年(1967)	自治省から地方自治功労者として賞牌を受ける
昭和 43 年(1968)	京都市から第 1 回文化功労賞を授与される
昭和 54 年(1979)	逝去(享年 85 歳)
平成 7 年(1995)	福岡市博物館 が観方コレクションのうち 幽霊画 を含む1万数千点を購入



自作「夕霧」の前にて60歳代の吉川観方
写真提供：京都府立総合資料館

妖怪とは？

妖怪は、人間の周囲の自然環境から生まれてきた神。ただし、その神は人々の信仰の対象から外されていて、人に悪意を持って襲いかかり、時には悪戯をすることもある。



百怪図巻より火車

妖怪が生まれる要因

我々の周囲には、いつも闇がある。暗闇、あるいは未知という闇。理性的な判断や力の及ばない闇の世界に対して、我々は少なからず恐怖を感じる。その恐怖の対称が複数の人の共通認識となったとき、噂となり、伝承となり、やがて、それは日本人の豊かなイマジネーションによって形になる。それが妖怪だ。

妖怪は、我々の「心の闇」または「社会の闇」の世界を表現したものと考えることもできよう。科学技術の進歩が著しい昨今、はたして、我々の心の闇はどうなっているのか。現代の闇は、はたしてどんな妖怪を生み出しているのだろうか？



幽霊図 河鍋暁斎 明治3年

幽霊と妖怪の違い

(1) 民俗学者の柳田国男による、幽霊と妖怪の定義

おばけは出現する場所が決まっているのにたいし、幽霊はどこへでもあらわれる。

おばけは相手をえらばず、だれにでもあらわれるのにたいし、幽霊の現れる相手はきまっていた。

おばけの出現する時刻は宵と薄明かりの時であるのにたいし、幽霊は丑満つ時といわれる夜中に出現した。(おばけ = 化け物 = 妖怪、妖怪は近代に使われる言葉)

(2) 諏訪春生『日本の幽霊』(岩波新書、1988)の定義
人であること 死者であること 生前の姿であること

この三つの条件をすべて満たしているのが幽霊。逆に、この条件を満たしていないものは妖怪。

では、 の条件を満たし に当てはまるか疑問の「骸骨」は幽霊か？それとも妖怪なのだろうか？



相馬の古内裏 歌川国芳 江戸末



幽霊図 溪斎英泉 江戸後期



足のない幽霊図
駒井源琦歌 江戸中期



夕霧(お菊) 吉川観方 昭和23年



朝露(お岩) 吉川観方 昭和23年

足のない幽霊を最初に描いたのは？

足のない幽霊を初めて描いたのは、江戸時代中期の日本画家**円山応挙**(1733~95)だといわれている。しかし実際にはもう少し古くからあったようだ。応挙の描いた幽霊画は、懐に右手をあて物憂げな表情の美女が斜めに構える。ずっと消える足もとの表現は、背景も描かぬシンプルな構図も手伝って、人々に強いインパクトを与えた。以来、円山派の弟子を中心に、多くの絵師が応挙スタイルの幽霊画を描き、足のない幽霊が定番となった。

足のない幽霊画は、応挙のオリジナルとは言い切れないが、応挙がいなければ、「日本の幽霊には足がない」という常識は生れなかったかもしれない。



『和漢百物語』(月岡芳年 慶応元年・1865)

月岡芳年(1839~92)が絵を描き、仮名垣魯文らの戯作者が文を記したの怪奇画(浮世絵版画)シリーズ。題名のとおり、日本と中国の怪談を画題とするが、絵は26枚。怪談が100あるわけではなく、「怪談を多く集めたもの」という意味での「百物語」。

和漢百物語より「清姫」

愛を誓った旅の僧安珍に裏切られた清姫は、憤怒の果てに蛇に身を転じて、安珍の後を追いつい紀州(和歌山県)道成寺にたどり着く。そして、女人禁制の寺に逃げ込み鐘の中に隠れていた安珍を、鐘ごと炎で焼き尽くした。本図は、恨み狂って髪も着物も乱れた清姫が描かれ、着物の模様は蛇の鱗を思わせる。



付喪神図(伊藤若冲筆/江戸中期)

茶碗や筆筒、傘など、あらゆる道具は百年経つと、精霊が宿り妖怪化すると信じられ、これらは「付喪神」と呼ばれた。その呼称は「百年に一とせたらぬ付喪神」といわれ、九十九に由来する。筆者の伊藤若冲(1716-1800)は、京都錦小路の青物問屋に生まれ、初め狩野派に学び、さらに中国画を研究、また自然から学ぶことで独自の作風を築いた。

幽霊図 伊藤若冲 江戸中期

百怪図巻(佐脇嵩之筆/元文2年・1737)

日本古来の様々な妖怪を描いた、まさに妖怪図鑑。筆者の佐脇嵩之は、英一蝶(1707~72)の門人。類例も多く、約100年後に描かれた、八代市松井文庫所蔵の「百鬼夜行図」(尾田叔太郎筆、天保3年・1832)と比較すると、妖怪の種類や図柄がよく似ている。



上 百怪図巻(吉川観方コレクション)



左 百怪図巻(吉川観方コレクション)
右 百鬼夜行図(松井文庫)

松井文庫の妖怪画

「百鬼夜行図」尾田叔太郎筆、天保3年(1832)

百鬼夜行とは、得体の知れない不気味なものが夜道を行列し、がやがやと歩くというもの。人がこれを見ると死ぬと伝えられ、忌み嫌われた。

「百鬼夜行図」の写し

「化物婚礼絵巻」岡義訓筆、文久3年(1863)

一晩のうちにとりおこなわれる妖怪の婚礼物語。婚姻の申し入れ、見合い、結納、嫁入り行列、祝言、出産、誕生祝いと続き、日の出に驚いて逃げる妖怪の姿が描かれている。

「幽霊図」作者不詳、江戸時代後期

松井文庫には、全国に名だたる妖怪画がある。只今、八代市立博物館(), 松井文庫展示場(), 熊本県立美術館()にて展示中。こちらをあわせてご覧いただきたい。



怪談

怪談「皿屋敷」

「一枚、二枚……」何回数えても、皿が一枚足りないと嘆くお菊。

とある藩主の下屋敷に奉公していた美しい腰元のお菊は、同じ屋敷の若侍と恋仲になった。そんなお菊に横恋慕した殿は、お菊に言い寄るが、殿の思いはかなえられなかった。気まずい毎日のお菊。ある日、お菊は家宝の皿の一枚を誤って割ってしまった。それは、將軍より拝領した貴重な十枚そろいの皿。殿は、日頃邪険にされた恋の恨みとばかり、お菊を手打ちにし、死体を古井戸に投げ込んだ。

以来、夜な夜な井戸の側で、悲しげに皿を数えるお菊の声が……。

怪談「子育て幽霊」

毎晩一文銭を持って飴を買いに来る女がいた。不思議に思った飴屋は、ある日、女の後を追ってみると、女は墓地に消えていった。すると、墓の中から赤ん坊の泣き声、そして「お棺の中の六道銭で赤ん坊を育ててきましたが、銭も尽きました。」と嘆く女の声がした。驚いた飴屋が縁者に知らせて墓を掘り返してみると、母親の死体のそばで赤ん坊だけが生きていた。

怪談「佐倉宗吾」

佐倉宗吾は、17世紀に実在した下総(千葉県)の人で、実録『佐倉義民伝』の主人公。歌舞伎では浅倉当吾と名を変えて登場する。

当吾(宗吾)は領主織越の重税にあえぐ農民を救うため、將軍に直訴する。お陰で重税は改められたが、当吾一家は処刑されてしまう。目の前で罪のない子どもたちまで殺された当吾の怨念は強く、幽霊となって領主を悩ませた。



怪談「清玄」

京都清水寺の僧侶清玄は、美しい桜姫に魅かれ清貧の身から墮落してしまう。清玄はしつこく姫に迫るが、姫の下僕によって殺されてしまう。死んでなお姫への思いを募らす清玄は、幽霊となって付きまとう。

怪談「東海道四谷怪談」

『東海道四谷怪談』は、歌舞伎世話物の作者・4世鶴屋南北の最高傑作としてあまりにも有名。ここに描かれたのがお岩の物語。

お岩の夫、民谷伊右衛門は、隣家の伊藤喜兵衛の財産目当てに、その孫娘お梅との縁組をはかり、妻お岩を追い出す計画を練る。一方、喜兵衛は、伊右衛門に恋する孫娘お梅のため、お岩に「血の道」の薬と称して顔の崩れる毒薬を贈った。美しい顔が醜く変貌したお岩は、夫伊右衛門と伊藤喜兵衛一家を恨みながら悶死。やがてお岩の猛烈な復讐が始まる。



怪談「牡丹燈籠」

旗本の娘お露は、浪人萩原新三郎に一目惚れするが、その恋がかなわぬまま病死してしまう。死んだ後も新三郎への思いは強まるばかり。お露は下女お米の霊とともに、毎夜新三郎のもとに通い続けた。生前の美しい姿のままのお露は、牡丹燈籠を手に、下駄をカランコロンと響かせながら訪ねてくる。そう、お露は足のある幽霊なのだ。



怪談「小幡小平次」

日頃から陰気で幽霊とあだ名されていた旅役者の小幡小平次は、後妻のお塚とその密夫(浮気相手)で同じ一座の安達左九郎の策略によって、安積沼で殺されてしまう。幽霊となった小平次は、二人の寢床に忍び入り、お塚は連れ去られ、左九郎もやがて狂って死んでゆく。